『歎異抄』のおはなし⑰第十二条（3）
学問と信心

今日は第十二条の 3 回目で、前回からの続きになります。

前々回のところで唯円房（ゆいえんぼう）は、「学問をしない人は、いくら念仏しても救われない」という「学解往生（がくげおうじょう）の異義」に対する批判を展開し、名聞利養（みょうもんりよう）すなわち名誉欲や財欲などを満たすための学問は、往生のためには全く必要ないとしました。
しかし阿弥陀仏の本願や名号のいわれを明らかにするための学問は、必要であるということをお話しました。
信仰は、学問や知識によるものではありません。
しかし信仰は、「阿弥陀仏の本願とは何か」という知識があることによって、より深められるのです。

そして前回は、仏法を巡って論戦し、自分の宗がすぐれていて他の宗は劣っているなどと言い争うことについて、唯円房が戒めました。
『歎異抄』が書かれた当時、専修念仏の人と自力聖道門の人との間に、どちらの教えがすぐれているのかという論争が、しばしば起こりました。
こちらの方がすぐれていて、そちらが劣っているとお互いに非難し合う法論は、結局自分の教えを謗（そし）っていることになるといわれます。
そこで非難合戦にならないように、お念仏の教えはつまらない教えだとけなされても反論せずに、どのように対応すればよいかが示されました。
「諍論（じょうろん）のところには、もろもろの煩悩をこる、智者遠離（ちしゃおんり）すべき」
（現代語訳）〈言い争いをすれば、さまざまな煩悩が起こるのです。智慧ある人は、論争から遠く離れるべきです。〉
このように、煩悩の元である言い争いや論争を避けるようにということが記されました。

◎教えを信じる人も謗る人もいる

「故聖人のおほせには、この法をば信ずる衆生もあり、そしる衆生もあるべしと、仏ときおかせたまひたることなれば、われはすでに信じたてまつる、また、ひとありてそしるにて、仏説まことな

りけりと、しられさふらふ。」

「故聖人」というのは、親鸞聖人をさします。
「仏説」は、お釈迦様の説かれた教えのことです。

（現代語訳）
〈今は亡き親鸞聖人がおっしゃるには、「『この念仏の教えを信じる人もいれば、それを謗(そし)る人もいるだろう』と、お釈迦様がすでにお説きになっています。『私はすでにこの念仏の教えを信じておりますが、他の人が念仏を謗ることもあります。ですから悪口を言う人があるという、お釈迦様が説かれたお言葉は、本当でした』と知られます。」〉

この教えを信ずる人も謗る人もいると、お釈迦様がかねて説いておられるというのです。
謗る人がいるからこそ、お釈迦様の言葉が本当なのだとわかるのです。
しかし、たとえいかに多くの人が非難しても、動揺せずに、怒らないこと、動かないこと、憎まないこと、争わないことです。

「しかれば往生はいよいよ一定(いちじょう)とおもひたまふべきなり。」

「一定」は、確実なこと、しかときまったこと、間違いないこと、という意味です。

（現代語訳）
〈「ですから、お釈迦様の言葉が正しいなら、私たちの浄土往生はますます間違いないと思うのです。」〉

お釈迦様の言葉が本当ならば、同時に私たちの往生も確かであると、心強く受け止めなさい、ということです。

◎謗る人がいなかったら、かえって怪しむべきです

「あやまてそしるひとのさふらはざらんにこそ、いかに信ずるひとはあれども、そしるひとのなきやらんともおぼえさふらひぬべけれ。」

「あやまて」は、もし、ひょっとして、といった意味です。
「いかに」というのは、何故、どうして、という意味です。

（現代語訳）
〈「もしも念仏の教えを謗る人がいなかったなら、『どうして信じる人はいるのに、謗る人はいないのだろうか、仏様の言葉は本当だろうか』と、怪しんで不審に思わねばなりません。」〉

かえって反対に、謗る人がいなかったら、信ずる人がいるのに謗る人がいないというのは、お釈迦様の言葉が誤りであったと怪しむべきだというのです。

「かくまうせばとて、かならずひとにそしられんとにはあらず、仏のかねて信謗（しんぼう）ともにあるべきむねをしろしめして、ひとのうたがひをあらせじと、ときをかせたまふことをまうすなりとこそさふらひしか。」

「かねて」は以前から、という意味です。
「信謗」とは、仏法を信ずる人とそしる人のことです。

（現代語訳）
〈「このように申したからといって、必ずしも人に謗られなさいというのではありません。お釈迦様は、前々から教えを信じる人と謗る人とがどちらもいるはずだと知っておられて、『悪口を言われたからといって、お念仏の教えを信じる人が教えを疑うことのないように』とお考えになって、そのようにおっしゃられたのです」と仰せになりました。〉

私たちは、謗られると不安になってしまいますが、謗る人の存在が、かえって自身の往生を証明してくれているのです。
謗る者がいるからといって、自信をなくしてはいけませんよ、と説いてくださっているのです。

◎如来の御本意や悲願のお心を知り、平等の救いを説いてこそ学問の値打ちがある

「いまの世には学文（がくもん）してひとのそしりをやめ、ひとへに論議問答（ろんぎもんどう）むねとせんと、かまへられさふらふにや。」

「学文」は、学問のことです。
「やめ」は、やめさせる、という意味です。
「かまへられさふらふ」は、心がけておられるのだろうか、ということです。

（現代語訳）
〈このごろは、念仏者も学問をして、他の人が謗るのをやめさせるよう、ただ議論し問答することが大切だと思っておられるのでしょうか。〉

「学問せば、いよいよ如来の御本意をしり、悲願（ひがん）の広大のむねをも存知（ぞんち）して、いやしからん身にて往生はいかがなんどとあやぶまんひとにも、本願には善悪浄穢（ぜんあくじょうえ）なきをもむきをも、とききかせられさふらはばこそ、学生（がくしょう）のかひにてもさふらはめ。」

「悲願」は、阿弥陀仏の大悲の本願のことです。
「いやしからん身」というのは、下賤（げせん）な身、とるに足りない身、といった意味です。
「善悪浄穢」とは、善人と悪人と、きよらかな人とけがれた人、ということです。
「学生」は、学者のことです。
「かひにても」というのは、値打ちのことです。

（現代語訳）
〈学問をすることによって、ますます深く阿弥陀如来のお心を知り、阿弥陀仏の本願の広大な慈悲のお心を知って、『自分のような卑（いや）しくつまらない者は往生できないのではないか』と心配している人にも、阿弥陀様の本願は、善人か悪人か、心が清らかであるかないかといった分け隔てなく、平等に救ってくださるということを説き聞かせられてこそ、学問をする者としての値打ちもあるでしょう。〉

「悲願」というのは、仏教用語では、仏や菩薩が慈悲の心から衆生を救おうとして立てた誓願のことをいいますが、オリンピックなどで「悲願の金メダル」などという場合には、どうしても成し遂げたいと思う悲壮な願い、という意味だそうです。現代一般の使い方と、仏教用語とでは意味合いがだいぶ違います。

学問するというのは本来、ますます深く仏様の教えを知り、如来の広大な慈悲のお心を知ることです。

ですからもし学問をするなら、「学問によって救われるのではない」ということを学ぶべきです。学問によって救われるのではなく、信ずる者が救われるのです。

たとえ自分なんかとても往生できないと思っている人に対しても、「本願においては善人も悪人も、心が汚れているとか清らかであるとか、そんな分け隔てはないのです」といったお話をしてこそ、学問する値打ちがあるのです。

◎「学仏大悲心」と「自信教人信」

阿弥陀仏の慈悲を学び、それを伝えることができたら、それ以上の学問の本望はありません。
まさしく**「学仏大悲心（仏の大悲心を学ぶ）」**（善導大師『観経疏』「玄義分」の「帰三宝偈」（「勧衆偈」とも））という生き方で、それが**「学生のかひ」**〈学問をする者としての値打ち〉なのです。

これを書かれた善導大師は浄土真宗の七高僧のお一人で、中国で浄土教を大成されたお方です。
親鸞聖人の師匠である法然上人が「偏に善導に依る」（「偏依善導」と言われて、善導大師の教えに深く帰依されました。

正信寺の客殿北側の窓のところにも、この言葉が書かれた小さな額が置いてあります。
これは私が通っていた東本願寺学院の真宗学の先生が、絵手紙の先生もされていて、その先生がご自分で描かれた絵と書を額に入れて、卒業生にくださったものです。

慈悲を喜ぶ姿こそが人々の信心獲得につながるのであり、まさしく**「自信教人信」（自ら信じ人を教えて信ぜしむ）**（善導大師『往生礼讃』）の生き方です。

以下は、『往生礼讃』からの言葉です。

「自信教人信
難中転更難
大悲伝普化
真成報佛恩」

（書き下し文）「自ら信じ人を教えて信ぜしむること、難きがなかに転たさらに難し、大悲をもって伝えてあまねく化するは、まことに仏恩を報ずるに成る」

（現代語訳）〈自ら信じることにより人を教えて信ぜしむのは、難しいなかに更にますます難しいことですが、人に大悲を広く伝える教化が、まことに阿弥陀仏への報恩となるのです〉

自ら信じる姿が人の信を導き、他人に信を勧める教化が阿弥陀仏への報恩になるというわけです。

そして江戸時代の先達は、「自分が救われるためには学問は要らない。しかし、他の人に親鸞聖人の教えを伝えるためには、学問が必要である」と述べられたそうです。

◎学問しなければ往生できないとおどすのは言語道断

「たまたまなにごころもなく、本願に相応して念仏するひとをも、学文してこそなんどといひをどさるること、法の魔障なり、仏の怨敵なり。」

「なにごころもなく」とは、すなおな気持ちで、無心に、はからいを離れて、純真に、という意味です。
「相応」は、よくかなうこと、という意味です。
「魔障」とは、仏の教えをさまたげる悪魔のしわざ、ということです。
「怨敵」は、うらみの深い敵、かたき、といった意味です。

（現代語訳）
〈それなのに、たまたま何のはからいもなく、素直に阿弥陀如来の本願のお救いを信じて念仏する人に、『経典をよく勉強してこそ往生できる』などと言いおどすのは、仏法をさまたげる悪魔の所行であり、お釈迦様に敵対する者のすることです。〉

本願を素直に信じ念仏して喜んでいる人々に対して、学問をしなくてはならないなどと言っておどすような人は、実に本願の反逆者であり、他の人を迷わそうとするのは言語道断の行為です。

◎「自障障他」自分だけでなく他の人をも迷わせる

「みづから他力の信心かくるのみならず、あやまて他をまよはさんとす。」

「かくる」は、欠ける、という意味です。

「あやまて」というのは、誤って、ということです。

（現代語訳）
〈そのような人は、自分自身に他力の信心が欠けているだけでなく、誤って他の人をも迷わそうとするものです。〉

善導大師の『往生礼讃』には、**「自障障他」**というお言葉があります。
これはみずからをさまたげ、他人をもさまたげることであり、先の「自信教人信」とは正反対のあり方です。

自分自身が迷い続けるだけでなく、他者をも迷わせるあり方を、ここでは批判されています。

親鸞聖人は、『高僧和讃』（善導大師）で、次のように詠まれました。

「西路を指受せしかども
自障障他せしほどに
曠劫已来もいたずらに
むなしくこそはすぎにけれ」

（現代語訳）
〈過去に善知識（念仏の教えを勧め導く者）が西方浄土への道を説き示してくださったけれど、自障障他の生き方を送っていたために、はかり知ることのできない遠い過去からいたずらに、迷いの世界でむなしく時を過ごしてきたのです〉

そして親鸞聖人は、この和讃の「自障障他」という言葉に「わが身を障へ、ひとを障へ乱るなり」という左訓（注釈）を施されています。

◎聖人のお心に背き、弥陀の本願にも背く

「つつしんでおそるべし、先師の御こころにそむくことを。かねてあはれむべし、弥陀の本願にあらざることをと、云々。」

「おそる」は、恐れ慎(つつし)む、という意味です。
「先師」というのは、親鸞聖人のことです。
「かねて」とは、と同時に、あわせて、といった意味です。

（現代語訳）
〈つつしんで恐れるべきです、浄土に往生するためには学問が必要であると説くことは、親鸞聖人のお心に背(そむ)くことを。あわせて悲しむべきです、これは阿弥陀仏の本願に背くことを。〉

「つつしんでおそるべし」と「先師の御こころにそむことを」と、「かねてあはれむべし」と「弥陀の本願にあらざることを」とは、言葉の意味を強調するために、語句の順が普通とは逆になっています。

唯円房は、親鸞聖人が誡(いまし)められた「自障障他」の人たちのことを、「法の魔障、仏の怨敵」とまで厳しい言葉で述べ、そして「親鸞聖人のお心に背(そむ)き、弥陀の本願に背く」と、最大級の批判の言葉で結んでいます。

私たちは心を引き締めて、親鸞聖人のお心に背かないようにするべきであり、学者ぶることは阿弥陀仏の本願に背くということを悲しく思うべきでしょう。

◎「直入(じきにゅう)の機(き)」と「回心(えしん)の機」

曽我量深先生は、次のように言われたそうです。
「学問が必要であるかないかは、必要とする人の気質によります。学問など必要ないということはありません。どういう人にとって学問が必要ないかというと、「直入(じきにゅう)の機(き)」と「回心(えしん)の機」があり、「直入の機」と言われる人々にとっては、学問は必要ではないと言われます。この人たちは、理屈を差しはさまなくても教えが素直にいただけるので、直入の機と言います。」
「機」というのは、仏の教えをこうむるべき衆生、人のことであり、私たちの能力、あるいは仏に対して生ずる信仰心や心のはたらきも意味します。
「直入の機」の人は、阿弥陀仏の誓願のいわれを聞いてただちに理解できるので、学問は必要ないのだそうです。
一方、「回心の機」とは、いろいろな道筋を経て、文字通り、今までのこころを翻(ひるがえ)して、本願念仏にあらためて帰入(きにゅう)する人のことです。
「本願を信じ念仏をまうさば仏になる、そのほか、なにの学問かは往生の要(よう)なるべきや」(『歎異抄』

第十二条）

（現代語訳）〈阿弥陀仏の本願を信じて念仏すれば必ず仏になるのです。この他に、どのような学問が浄土に往生するために必要なのでしょうか。〉

ということを理解できない人々が、「回心の機」です。

それゆえ「回心の機」の人は、「本願のむねを知る」ために、学問を重ねる必要があるのです。

学問と信心について、今日はこのあたりにしたいと思います。

次回は、来年 3 月 20 日の春分の日、春のお彼岸法要において、第十三条を拝読したいと思います。

第十三条では、善悪の宿業の問題が論じられます。

宿業というのは、過去世につくった善悪の業のことです。

ご清聴ありがとうございました。